
紡がれる異世界の物語（仮）

イソ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紡がれる異世界の物語（仮）

【Nコード】

N6314Z

【作者名】

イソ

【あらすじ】

少年は願う。例え存在がなくなっても、愛する人を忘れないように。

少女は願う。愛する者がいなくなっても、運命で紡がれた糸が自分の元にあるようにと。

紡ぐ世界に紡がれる世界。その中で少年と少女は別れを告げた。消えゆく意識の中、誰かに呼び出されるように少年は目を開く。

「……ここは、どこだ？」

成績優秀、容姿淡麗ないいところづくりの少女が呼び出したのは『違

う世界』の住人だった。こちらの世界と違う魔法を使う少年兼使い魔を呼び出したことをきっかけに、少女は波乱と言う紡がれし糸に絡まっていく。

最強系異世界住人（使い魔）と、生徒会長な美少女が織りなす新たな運命を紡ぐ物語。今、開幕――。

プロローグ（前書き）

勘を取り戻すために新規小説で心機一転。つたない文章ではございますが、読者が楽しく読めるように頑張っていきたいと思えます。

プロローグ

少年は願う。例え存在がなくなっても、愛する人を忘れないように。少女は願う。愛する者がいなくなっても、運命で紡がれた糸が自分の元にあるようにと。紡ぐ世界に紡がれる世界。その中で少年と少女は別れを告げた。消えゆく意識の中、誰かに呼び出されるように少年は目を開く。「……ここは、どこだ？」成績優秀、容姿淡麗ないいとこづくめの少女が呼び出したのは『違う世界』の住人だった。こちらの世界と違う魔法を使う少年兼使い魔を呼び出したことをきっかけに、少女は波乱と言う紡がれし糸に絡まっていた。最強系異世界住人（使い魔）と、生徒会長な美少女が織りなす新たな運命を紡ぐ物語。今、開幕――。

前書き 勘を取り戻すために新規小説で心機一転。稚拙な文章ではございますが、読者様が楽しんでいただけるように頑張りたいと思います。

小説本文 「ごめんな」

かすれる意識の中、かろうじて出せた言葉は愛する者への謝罪だった。

「ほんとにごめ……ん、な」

「……あんた、ばかよ」

かろうじて出せた言葉は愛する者を侮辱する言葉だった。

「ほんつとに、あんたは……ばがなんだがら！」

最初に出会った時は、目の前にいる青年が嫌いなはずだった。身勝手で、無口で、不器用で、いつも私の事を困らせて。

涙が頬を伝う。言葉が口から出なくなる。もっと伝えたい言葉が

あるはずなのに、もつともつと彼と一緒にいたいのに。それを拒絶するかのように涙が止まらなくなり、彼女を困らせる。

「なくな……よ、せつかく終わつたつてのに」

青年はそう言つて、残る力を振り絞つて利き手の右腕を動かし彼女の涙をぬぐう。けれど、その行動がまたもや彼女の涙をあふれさせるのを青年は知らない。青年は不器用だから、そんなことしかできない。

「だつて、だつてえ……！ あんたの、か、体が……！」

彼女は、涙があふれる目で彼の姿を見る。元の色がわからなくなるぐらい、彼の血で赤く染まつた服。彼女を守るために、その左腕と右足は刈り取られ、もはや原型をとどめていない。顔も他と同様だ。

すると、青年はその言葉が理解できなかったのか少しの間をおいた後、口を開く。

「お前を守れたんだ……。それぐらいなら、安い……もんさ」

その代償が自分の死だと理解しつつ、青年は彼女を慰めようと右腕を上げる。だけれど、上げようとした腕は上がらず、彼は不思議そうにそれを見た。

「ごめんな、もう……お別れみたいだ」

その言葉に、少女はきつく唇を噛む。

「また、会えるよね？」

無理だとわかっていても、かなわぬ望みだと理解していても、少女はその言葉を口にする。自分が受け入れることができるために、決心がつくように。

「……ああ、もう迷うこともないだろうさ。だから、お前も安心して生きてくれ。答えを得たんだ。前みたいに迷うこともないよな？」

「……うん」

「そっか、よかった。これで……安心して……」

青年の言葉が紡がれなくなる。それはつまり、彼がもう言葉を発しないわけで。自分と一緒にいる時間がなくなっただけ。

「……また、会おうね。エルイス、紡がれる世界のどこかで」

紡ぐ世界、紡がれる世界。本来は合うはずのなかったこの世界で、青年と少女は出会った。そして、また新たな紡ぎが二人を包む。

少女はその世界で彼を待ち、青年は新たな世界で紡ぎを得る。それがどのような運命になるのか、それは誰も知る由もない。

だけれど、少女と青年はしっている。どんな場所にいても、一度紡がれた思いはほどかれないのだと。

ブログ（後書き）

（；・ω・）文字数少ない（少しずつ多めにかけるよう頑張っています）

第一話 紡がれた世界は新しき場所（前書き）

文字数え
…

第一話 紡がれた世界は新しき場所

周りの生徒達から聞こえる阿鼻叫喚を聞いても、彼女は静かだった。

先ほど手渡された少々厚めの用紙を見て、にんまりと口の頬が緩むのを我慢する。ここではだめだ、周りに人が多すぎる。

しかし、用紙に書かれていた物はわたしの表情を壊すには容易なものだった。ついに耐えきれず、満面の笑みになる。

「おやおや、生徒会長さんは今回の成績にえらくご満足なことでは」

はっ、と気付いた時にはもう遅かった。目の前に座っていた一人の生徒が先ほどの様子を見ていたのか、にやにやとこちらを見つめ続けている。

「なっ！？ べ、別にたいしたことないわ……」

「ふーん、その割にはさっきの顔はそう物語ってないけどね。いやー、見せたかったなあ。いつもは鉄仮面で有名な生徒会長様がこう、にんまりと……」

ぐにーと両手の人差し指で頬を上げる生徒に彼女はその整った顔を真っ赤にし、

「ぜ、絶対に言わないでくださいね！ 言ったら許さな——！」
「声がでかいよ、生徒会長様」

右手を前に掲げ、人差し指で静かにするように生徒が形を作る。我に気付いた彼女が周りを見ると、先ほどまでわめいていた数人の男女生徒が不思議そうにこちらを見つめていた。それを見た彼女は

なるべく皆がこちらを見ないように机に体を預ける。

それを見ていた眼の前の生徒がまた、面白おかしいような顔をしてこちらを眺めていた。なんて、小悪魔な性格をしているのだろうかこの子は。

「……覚えていなさいよ、レイカ」

レイカと呼ばれた少女は、睨めつけられている事にも億さず、

「おお、怖い怖い。さすが生徒会長様の言葉は重みがありますないや、ここはレイラ嬢と言ったほうが正しいのかな？」

満面の笑みを浮かべてこちらを見るレイカの顔に、反省という二文字はないらしい。

いつものことだ。そう割り切って、昔からこちらの困る顔を見るのが好きな悪友を見ないようにしてもう一度用紙に目を通す。

第三星期年度末成績書 最優秀成績者 レイラ・ラーティクス

平たく言えば、今年度の成績書だ。それも超最難関の有名魔法魔術学園と言われるこのクレイアルヴァー口で。

「最優秀成績者……、これでやっと、私も召喚技法の秘儀が……」
「子供のころからずうっと言ってたもんねえ、それ。長年の夢がようやく叶うってわけか……。なんとも夢のあることで」

成績書であつたはずのくしゃくしゃに丸まった物体を御手玉にしながら、レイカが興味なさげに言う。

「そういうあんたはどうなのよ。せつかく勉強すれば私と同じく
らの力があるっていうのに、努力もせずぐうたらしてばかりで」
「私はね、あんたと違って平和な学園生活を堪能したいんだ。勉
強ばかりしてちゃあ、学生の本分ってもんが全うできないだろう
？」

「それぐらいわかるだろうにつて顔して言われるとむかつくわね
……」

レイカの言葉に脱力しつつ、レイラは成績書をしわができないよ
うに丁寧に鞆にしまうと帰るために立ちあがった。周りをちらほら
と見れば、今回の成績に不満を残しつつも久しぶりの休みに嬉しさを
抑えきれない生徒達が群をなして教室の入口へ向かっている。

「おや、帰るのかい？もう少しゆっくりしていても罰はあたらん
だろうにさ」

御手玉をやめ、レイカがもう少しここにいなよと促す。本当に、
この子は遠慮と言うものがないらしい。それがまた、彼女の魅力の
一つでもあるのだが。

「お生憎さま。今日は私、忙しいのでここで帰らせてもらっわ」
「つれないねえ」

「そう思うなら、あんたも私と一緒にいてく？有意義な時間と
いうものがどういうのか教えてあげるわよ。魔術系統の魔力消費量
に関する資料探し、魔法陣の発生位置指定における三次元的見解の
レポートとか——」

「うへえ、わかりましたよ。そんなことするぐらいなら、大人し
く一足先に寮に帰って他の奴らと一緒にパーティーの準備でもして
ますよ」

「わかればよろしい」

レイラが口にする言葉にまた始まったよ、とぼやきながらレイカも立ち上がる。

彼女とこうやってくだらない事で時間をつぶすのもたまには悪くないのだが、今回ばかりはそうもいかない。山のような宿題、そして最優秀成績者にだけ伝えられる古代魔術、召喚技法の秘儀を習うための前準備をしなければ。

召喚技法——成績が優秀な者だけに伝えられるこの魔術は、精密に構成された魔法陣と本来ならば反発しあうはずの魔術石を用いて行われる超高難易度技法の一つ。本来、この技法は遙か昔、まだ闇の象徴とも言うべき者が世界に蔓延っていた時代にその者たちを滅する力を得るために生み出されたというのがこの技法と言われている。

この世界はどこかの世界とつながっている。子供の頃から、親に聞かされる言葉だ。自分が今存在しているこの世界とはまた別に、もう一つの違う世界が存在し、私達と同じように営みを形成していて、その世界には『その世界』を守る守護者がいるとか。

子供の頃はおとぎ話として聞いていたが、この年になり魔術や魔法を勉強するようになって理解した。

『その世界』は存在する。

その証拠となるのが、『その世界』の守護者を召喚し、使役する技法、召喚技法。これによって召喚された守護者はそのものの意思に関係なく、こちらの世界に住人として繋がれ召喚した者の使い魔となる。

「やってみせるわよ……！」

召喚された者の強さ、それはすなわち召喚者の格にも繋がる。となれば、よりよい使い魔を呼び出すために事前勉強を行うのは大切なことだ。

「やってやるのもいいけどさ。その緩み顔はなんとかしないといけないねえ」

立ち上がったかと思えば、突然黙りこみ、あげくににやけた顔で意気込む友であるはずのレイラを見て、ぼそっと、誰に聞こえるでもなくレイカは呟いた。

第一話 紡がれた世界は新しき場所（後書き）

（ ・ ・ ・ ） 文字数最低4000文字はいくようにせんといかんね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6314z/>

紡がれる異世界の物語（仮）

2011年12月21日01時46分発行